

# 森鷗外の人間存在論

前田淳

- (00) 梗概
- (01) はじめに
- (02) まことの我 ―明治20年代―
- (03) あこがれゆきし 夢のかよひ路 ―明治30年代―
- (04) 霊の鏡 ―明治40年代から大正の初めまで―
- (05) 「自然」を尊重する念 そして死 ―大正11年―

## (00) 【梗 概】

森鷗外作品から人間の存在論に関わる文章を取上げて考察し、鷗外の霊肉二元論的人間存在論を明らかにしようとするのが本論の目的である。鷗外の人間存在論の展開が分かるように、取上げる作品を発表年代によって、明治20年代、同30年代、同40年代から大正5年、その後鷗外の死までと、それぞれほぼ10年に区切る。明治20年代では「舞姫」を取上げ、作中の文言「まことの我」と「我ならぬ我」に注目する。明治30年代で注目すべき作品は「マアテルリンクの脚本」及び「うた日記」中の短歌作品である。前者では文中の「霊の交流」という思想に注目し、後者では「あととめて 御魂や来ぬる 我魂や あこがれゆきし 夢のかよひ路」他、霊魂の活動に言及する作品を取上げる。この時期霊肉二元論的な人間存在論は作品の上に漸く明確になりつつある。明治40年代は「キタ・セクスアリス」をはじめとして、「不思議な鏡」「金比羅」「雁」「花子」等本論が取上げるべき作品は少なくない。鷗外の胸中にはいよいよ霊肉二元論的人間存在論が明確な形をとり始めたと考えられる。その霊魂活動の描写が一種の幽体離脱の諸現象と相似ることは注意すべきである。この時期の後半に多く書かれた歴史小説について鷗外は

「歴史其儘と歴史離れ」と題する文章を残している。文中「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる「自然」を尊重する念を発した」は、一見本論が唱える霊肉二元論とは繋がらないようであるが、この「自然」という言葉によって鷗外が示そうとした世界こそ、「まことの我」が住む世界であり、「靈魂」という真実が住む世界だったのではない。本論は最後にあの有名な「遺言」にある「宮内省陸軍皆縁故アレドモ 生死別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス」の「外形的取扱ヒ」を取上げ、霊的な世界を真実のそれと見た鷗外にとっては、物質の支配を受ける世界を虚妄と見ることは自然で、それ故鷗外はあのように強い言葉をもってその「取扱い」を拒絶したのであると本論は考える。

#### （01）はじめに

明治14年12月、医学士森林太郎は本人の留学への熱い希望、小池正直などの推薦、森家の期待、西周の斡旋等を押されて陸軍軍医となった。途中明治32年6月から同35年3月まで小倉への転任という忍苦の時期を経て、以後出世の道を進み、明治40年11月46歳の時に「陸軍軍医総監に任ぜられ、陸軍省医務局長に補せら」（鷗外全集年譜）れ、陸軍軍医としての栄達を極める。しかし、世の栄達を極めた人物とは幾分違った面がこの人物にはあった。すなわち、世の栄達を肯定的に捉える人格とともに、その栄達の人生的な意味を問い、それに強い疑問を投げかけ、その疑問に生涯向き合ったいま一つの人格が森林太郎という一人の人間の中に存在していたのである。この二人格の存在は鷗外の作品を読むものが誰しも感じるであろう。それは初期の作品「舞姫」には「心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり」という内省的な独白となって現われ、あの有名な遺言では「余は石見人森林太郎として死せんと欲す。宮内省陸軍皆縁故あれども生死別る瞬間あらゆる外形的取扱ヒを辞す」という強烈な意思の表白となって現われる。これまで深く関わってきた「宮内省陸軍」の取り扱いを「外形的」と断じ去るこの否定的な言葉の

裏には、別に「外形的」ではないものへの深い認識が存在していたに違いない。

本論はこの森林太郎という人物の裡にある二人格を霊肉二元論的な視点から理解し、作品その他の文章を年代を区切って取上げ、鷗外森林太郎の霊肉二元論的人間存在論を明らかにしようとするものである。

## (02) まことの我 ―明治20年代―

鷗外の初期の代表作「舞姫」(明治23年)の次の文言から考察を始めたい。

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、  
余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、  
官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的、器械的  
の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当  
りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあら  
はれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。 (下線前田)

法律研究の官命を受けてドイツに留学した主人公太田豊太郎がこれまで日本では感じたことのない内心の衝動を告白する箇所である。豊太郎は自分の内面に「まことの我」を感じ、それが留学先の自由な空気の中で「我ならぬ我」をしのいで、表面に現われて来たと想起している。しかも、それは「現われて来た」という消極的な存在としてあったばかりではなく、これまでの自分を「我ならぬ我」として「攻むる」という積極的な行為にまで及ぶものであった。「激しく呵責する、苛烈に責め苛む」という意味の表現「攻める」に籠められた作者の思いの強さが伝わってくる。そこには「我ならぬ我」に向かう「まことの我」の執拗で同情のない<sup>1</sup>「攻撃」の様が動的に言い尽くされている。これは「まことの我」に深い真実を認めて始めてありえた表現であった。「父の遺言」「母の教え」「人の神童なりなど褒むる」「官長の善き働き手を得たりと奨ま」すことなどこれまでの生育の環境から後天的に形成された自分は、所詮存在の深みに根を持たぬ底の浅いものとして突き放されること

になる。結句「まことの我」の前に膝を折る他ない仮の自分であるという確然たる認識がこの言葉の裏には存在している。

「処女作はその作家の未来を予告する」という。若年から晩年に至るまでの鷗外の文章を年代順に読み進めて行くと、「舞姫」と後年の諸作とにはある種の連続が見られる。いや、「連続」というだけでは足りない。「我ならぬ我」「まことの我」の正体を明らかにしようとしたその思索・探索の痕が作品のあるいは表に現われ、あるいは裏に隠れて存在していることが分かる。

ただし、「舞姫」は初期の作品である為か、この二者（「まことの我」と「我ならぬ我」）の捉え方が、後の鷗外の作品に見られる深みを欠くように思われる。「舞姫」は「時来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ」という。この「人の好尚」は「まことの我」の属性と考えられている。そうすると「まことの我」も詰まるところ自己の内部的存在であるということになる。即ちこれは、自己本来の欲求と外面からの要求とが一個の人間の中で繰り広げる相克のさまが描かれているということであり、それ以上にこの場面が語るものはない、といえるのではないか。「まことの我」は「人の好尚」にまで縮小され、「まことの我」の本体が何かというところに思索は及ばない。「人の好尚」という語句によってこの場面は「まことの我」の本性を明らかにすると同時に、その限界をも開示することになったというべきか。

処で、このような内面的葛藤は我々においても必ずしも珍しいものではない。自分本来の希望が生かされない現実には不満を持つ人は少なくないはずで、太田豊太郎のこの述懐は、それ自体はむしろ平凡な述懐であると見做すことが出来よう。この太田豊太郎の内面的な葛藤は常識的な理解が及ばぬものではなく、それは我々にも覚えのある人生の一コマである。

ただここで注意しておかなければならないのは「奥深く潜みたりし」という措辞である。豊太郎と相似た不満を持ち、機会を捉えて自分本来の道に向けて人生の舵を取り直し

たいと希望している場合にも、我々は自分の本来的希望に「奥深く潜みたりし」という誇大な形容は用いない。それは我々が今の境遇にある自分もそれを不満とする自分も共に「自分」であると認識しているからである。ところが、豊太郎はこれまでは恐らく意識の上にのぼらなかった「奥深く潜みたりしまことの我」をあらたに認めると同時に、これまでの「我」を「我ならぬ我」と認めることで、自己の分裂を意識することになる。しかも、「奥深く潜みたりし」といって「まことの我」は自分の内面深くある自分という表現の仕方をしている。先にこの作品では「まことの我」の存在に深い思索は見られないと書いたが、この一句「奥深く潜みたりし」に眼を凝らすとここにこれ以後鷗外の思索が辿る存在論の芽があるように思われる。

(03) あこがれゆきし 夢のかよひ路 ー明治30年代ー

「舞姫」に現われた「まことの我」はその後どのような展開を見せるのであろうか。

ここに明治36年4月竹柏会大会で鷗外が行った講演を内容とする「マアテルリンクの脚本」(明治36年)と題する文章がある。この文章はマアテルリンクの新作脚本「モンナ・ワナ」を紹介すると同時に、マアテルリンクの著作「貧者の宝」「知恵と運命」という二著作にも紹介の筆が及んでいる。<sup>2</sup>今この前者の目次と後者の短文群を一覧して気が附くことは、その心靈主義的な傾向である。このような傾向の文章に関心を示す鷗外には興味を惹かれる。「マアテルリンクの脚本」は靈魂に触れて次のようにいう。

此人は人の靈魂と云うものを一種変った方面から見ているのでございます。(中略)其魂が世界と一種の聯絡を保っていて、その聯絡が秘密のものであって、その秘密なところがそれが運命だと、斯う云う風に考えているのでございます。

講演の語り口を髣髴させる調子であるが、この一種神懸りとも評し得る内容を語る鷗外の調子は真剣とイワないまでも、真摯である。これはマアテルリンクの意見に寄せる共感なくしてはありえなかった語り口といってよい。鷗外は「罷り出でたるは小倉の田舎もの

だ」（潦休録）のような時に戯文風の碎けた物言いをする人でもあった。戯文風の文章を横に置くと、その内容と語り口の両面からこの「マアテルリンクの脚本」に寄せる鷗外の真面目な関心が伝わって来る。鷗外が「靈魂」の存在を疑わず、その働きにも関心を持っていたことが感じられるのである。

次の引用はその「靈魂」が他人との係わりにおける人間の存在に小さからぬ影響を及ぼすものであることを明かしている。先の引用と合わせて靈魂の作用は隠微なものとされる点を読み過ごしてはならない。

人々の間に、気に入るとか気に入らぬとか云うことがございます。好いた人嫌な人と云うものがございます。併し其理由を聞いて見ると、どうも何処が気に入らぬ、なぜ好いていると云うことは説明が出来ませぬ。

このような思想を懐くマアテルリンクに関心を示す鷗外に本論は強い関心を持つものである。というのも、「靈魂」なるものの存在が深い所で我々を動かすという見方は、あの「まことの我」としか表現できなかった作者の思索を一段深めて、「奥深く潜みたりしまことの我」の正体に近づくかのように思えるからである。この文章はマアテルリンクの思想を紹介する背後にある鷗外の想念を示唆するものと理解できるのである。

この文章はまた後年の作品「阿部一族」にある文言「人には誰が上にも好きな人、いやな人というものがある。そしてなぜ好きだか、いやだかと穿鑿してみると、どうかすると捕捉するほどの拠りどころがない」を直ちに思い起こさせる。勿論この相似は素材や思想の再利用という浅薄な相似ではなかったであろう。「阿部一族」は、「マアテルリンクの脚本」が発表されてからざっと10年の後に発表された作品である。この思想が鷗外の心魂に深く徹した思想であった故に殆ど10年を闊した後に長く地下にあった水が時を得て地上に湧き出るように鷗外の筆から流れ出たものであると見たい。この10年の間鷗外はこの思想を忘れ去りもせず胸に懐き続け消化し自家のものとしたのである。ここに「マアテルリンクの脚本」に持つ鷗外の根底的な共感を認めなければならない。

先に述べたように「マアテルリンクの脚本」は「モンナ・ワンナ」の紹介を目的とする文章であった。

女が云うには、どうも不思議でなりませぬ、私は今まで色々な人と話をしましたが、お前さんと話をすると、今迄とはまるで違って、お前さんの言うことが、恰も私の心の中からで  
るようで、お前さんと私との二人の間には、何の境界もないような気がいたしますと申します。男も亦、如何にもさ様でございます。私も又お前さんが此処に這入って来られてから一言  
を聞く毎に、総て腹の底まで分かるような気がいたします。実に人間と人間との間の壁が打抜  
かれて、光明がさすような心地がいたしますと申します。そうすると女が、如何にも不思議な心持でございます、丁度離れ島にでも、お前さんと二人いて、周囲には何もなくて、天地の間  
に只二人いるような気持ちがいたします、若しも私に夫というものが無いならば、私はお前さ  
んの詞に従うようになりはせぬかと迄思われますと申します。（下線前田）

「モンナ・ワンナ」の舞台はルネサンス時代のイタリアである。フィレンツェ軍が当時敵対関係にあったピサを包囲し、その降伏を勧告する場面を鷗外は取上げる。敵将プリンチワルリイはピサ軍の大將の妻ワンナを差し出せばピザの包囲を解く用意があることを伝えてくる。夫の反対を押し切ってワンナは敵将プリンチワルリイに会いに行く。引用箇所はワンナと敵将プリンチワルリイとが語を交す場面である。敵対関係から生じる緊張を孕んだ場面であるはずなのに、両者はここに見るような<sup>3</sup>不思議な心の交流を語り合う。

ここでワンナとプリンチワルリイが互いに愛情を語る言葉は言葉数も多く具体的で、実感に裏打ちされた迫力を感じさせる。このような二人の言葉によって鷗外が伝えたかったことは何か。たとえば、プリンチワルリイは「実に人間と人間との間の壁が打抜かれて、光明がさすような心地がいたします」という。これは人間と人間との不思議な深い結び付きを描こうとする意図に出た言葉である。このような人間の結び付きがあることを疑う人間には書けぬ言葉であり、マアテルリンクは勿論このような結び付きが人間にはあるものとしてこの場面を力を込めて描いている。それを紹介する鷗外の筆も読む者の心を動かす

真剣さを持っている。

それは「お前さんの言うことが、恰も私の心の中からでるようで、お前さんと私との二人の間には、何の境界もないような気がいたします」「私も又お前さんが此処に這入って来られてから一言を聞く毎に、総て腹の底まで分かるような気がいたします」「実に人間と人間との間の壁が打抜かれて、光明がさすような心地がいたします」「丁度離れ島にでも、お前さんと二人いて、周囲には何もなくて、天地の間に只二人いるような気持ちがございます」「若しも私に夫というものが無いならば、私はお前さんの詞に従うようになりはせぬかと迄思われます」とこの短い引用の中でも何度も何度も心の真実を明かす趣旨の台詞を繰り返す説明の仕方、その念の入れようを見ればよく分かるのである。このような場面を紹介する人間にも「魂の結び付きの存在」を深く信ずるということがなければ、紹介の筆にためらいが生じ、このような熱のこもった筆遣いはできなかったのではないか。この鷗外の筆に迷いはなく、むしろその逆で感情の表現は真率である。この場面を先に引用した箇所にもみられる思想と合わせて考えると、人と人とのこのような不思議な結び付きは「靈魂」における結び付きであると考えられはしまいか。鷗外はこの「マアテルリンクの脚本」を通して、人間の計らいを超えたところで人と人とは結び付くことがあるものであり、そこには靈魂の介在があるといいたいのではないか。鷗外が心霊の結び付きに信仰を持っていたことを証しする箇所である。人間の心と心の結び付き、いわば魂の結び付きというものこそが本当の人間の関係であるという考えが鷗外の胸の中にあっただけではないだろうか。

#### (04) 霊の鏡 —明治40年代—

ここに我々は「霊肉二元論」の筆を進める糸口を得た。これまで「舞姫」「マアテルリンクの脚本」と考察を進めてきたが、次に鷗外の韻文作品<sup>4</sup>「うた日記」(明治40年9月 46歳)を取上げて考えてみたい。



明治37年2月、日本政府はロシアに対して宣戦の布告を行い、ここに日露の大戦が開始された。鷗外もまた陸軍軍医部長としてこの戦いに参加する。この時戦地にあつて鷗外が創作した詩歌の集成が「うた日記」である。

さて、「うた日記」は形式的には新体詩、短歌、俳句を含む詩歌集だが、佐藤春夫「陣中の豎琴」が「筆者（前田注 佐藤春夫）の詩歌に対する狂的な愛情を以てして鷗外の詩歌を理解するためには実に前後二十数年を要した」と告白し、それを「鷗外の詩境の難解の證」としているように、この集は決して一読して直ちに理解ができるというような平明平易な詩歌ばかりの集ではない。しかし、それにもかかわらず作品をよく読めばここでも鷗外は意外なほど率直に胸懷を述べていることが分かる。それ故「うた日記」一卷は鷗外の人間観を知る格好の資料として重要な意味があると考えられる。

「うた日記」中の一章「夢がたり」に連作短歌が三群ある。「うた日記」中には他にも連作の短歌が含まれているが、この「夢がたり」の連作短歌が鷗外の人間存在論に関わるものである。

最初に考察するのは「うき我を」で始まる歌を冒頭に置く第一の短歌群十三首中の次の一首である。

あととめて 御魂や来ぬる 我魂や あこがれゆきし 夢のかよひ路

この連作短歌の主題は妻志げで、上記の一首もまた東京にある志げを念頭に置いて詠んだものであろう。一首の意は「私が旅に出た後を追ってあなたの魂がやって来たからか、或いは私の魂がこの身を離れてあなたの所にいったからか、夢にお互いを見るではないか」という程の意味であるが、ここで特に注意されるのは「我魂やあこがれゆきし」という三句目と四句目である。いうまでもなく「あこがれ」は古語で「強い思いを懐く人の魂が肉体を離れてさまよう」ことで、岩波の古語辞典（補訂版）は「（何かにさそわれて）心がからだから抜け出てゆく。宙にさまよう」という語釈の後に、「物思ふ人の魂は、げにあくがるものになむありける（源氏物語・葵）」を用例に挙げる。「あこがれ」は伝

統的な和歌の発想法であり、この発想を持つ古典和歌は<sup>5</sup>数多い。この発想ばかりではなく、「あととめて」「あくがれゆきし」「夢のかよひ路」等の措辞も伝統的な歌語として珍しくはない。鷗外はこの古典和歌の発想、古典和歌の措辞を借りて、早くもこの時期に「我魂や あくがれゆきし」と自己の体験らしきものを語ろうとしている。鷗外は魂が肉体を抜け出るといふ不思議な現象に特別の関心があったらしく、ここに取上げた一首は、古典文学の常套的な趣向の衣に隠れて、その体験を暗に示そうとしたのではないかと考えられる。

次にこの部（「夢がたり」）の第二の連作短歌群十九首の冒頭の二首である。

おほからん 我罪せむる ことの葉を 聞かばたふとき 教えとおもはん

さもあらばあれ いかなる人か 罪なくて はじめの石を 我になげうつ

ヨハネ伝福音書（第八章第七節）の「なんじらの中、罪なき者まづ石を擲て」を取り入れる後の一首に籠められた深い「罪」の意識に注意したい。「いかなる人か 罪なくて」という訴えには「我罪」の認識が前提としてあるが、このような罪の意識を鷗外が反芻していたことをこの歌は示している。それは「おほからん我罪せむる」という第一の歌も同断で、更には

かなとこに 身をばおきてん 鍛ひ打つ かぢが手力 おとろふるまで

と詠む九番目に置かれた一首にも「我罪」への消えぬ悔恨、自身を責め苛んで已まない苦悶が読み取れる。聖書から発想する歌は他にもある。この「夢がたり」の第3の連作短歌にある次の作品である。

いばらおろす 柔手はなしや 桂とは かねておもひも かけぬ額より

血よけぶれ 額はさながら 牲卓 棘おろさん やは手たのまじ

いぎたなき 十二の徒弟 よべどよべど さめざりし夜の ひとりをそおもふ

第2と第3の歌は「茨の冠冕を編みて、その首に冠らせ」（マタイ伝第二十七章二九）とあるのにより、「いぎたなき」で始まる一首はイエスが一度「弟子たちの許にきたり、そ

の眠れるを見て」(マタイ伝第二十六章四十)眠らずに祈りを凝らすようにといい、しかも「復きたりて彼らの眠れるを見たまふ」(マタイ伝第二十六章四三)による事はいうまでもない。福音書が伝えるイエス終焉の場面を借りて自らの胸懷を述べようとする趣向であるが、この聖書の場面を作歌に取り入れる聖書への関心は本論が説こうとする鷗外の人間存在論の理解への補助線とみることができる。それならば今少し大胆にこの鷗外の福音書への関心を本論の関心に引き付けて考えてみたい。

イエスは「なんぢら悔改めよ、天国は近づきたり」(マタイ伝第四章一七)と説き始め、以後比喻を用いたり奇蹟を示したりして「天国」(靈魂の世界)に入るために信徒が行うべきことを説き続ける。そしてその説教が「もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出だして棄てよ、五体の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり」(マタイ伝第五章二九)のように過激に傾く場合も少なくない。我が身に害をなす肉体を苛んで、靈魂の救済を得るという発想は、先の短歌「かなとこに 身をばおきてん……」の発想及びその激しさにおいて通うものがある。更に使徒を宣教に遣わす際に述べる言葉「身を殺して靈魂をころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」(マタイ伝第一〇章二八)は、明確に靈魂と肉体の別を認め、靈魂を肉体の優位に置き、使徒を励ます言葉である。これはまた鷗外の靈肉二元論への関心を明らかに示して余りあるものである。

鷗外の韻文作品のあるものは、散文作品以上に鷗外の胸中深奥の秘密を明かすものである。「舞姫」発表の約20年後に鷗外は詩集「沙羅の木」(大正4年9月)を発表している。この中に百首歌「我百首」(明治42年5月 「昴」)がある。この短歌の一群については、「この種の(前田注 奇想天外な)西洋と東洋、古代と現代、壮大な宇宙的創造と微視的な日常現実の直写といった組合せ・取合せの妙は「我百首」全体に互つてみられる顕著な特徴である。あえて言つてしまへばこれは鷗外の「あそび」かもしれない」という<sup>6</sup>評がある。しかし本論はその「あそび」とも見える歌の中に(-或いは、「あそび」であ

ったからこそ漏らすことができた - ) 鷗外の隠された「本音」を読む。

わが魂は人に逢わんと抜け出でて壁の間をくねりて入りぬ

をりをりは四大仮合の六尺を真直に豎てて譴責を受く

さて「わが魂は人に逢わんと抜け出でて壁の間をくねりて入りぬ」は、先の「うた日記」で取上げた「あととめて 御魂や来ぬる 我魂や あこがれゆきし 夢のかよひ路」と同様「魂が肉体から抜け出てゆくこと」、すなわち「あこがれ」を詠んだところに特徴がある。一首の上の句「わが魂は人に逢わんと抜け出でて」は詠み口こそ古典和歌のそれではないが、人に逢うために魂が我が身を抜け出でるという発想は矢張り古典的といえるである。しかし、下の句「壁の間をくねりて入りぬ」は古典和歌の発想ではない。<sup>7</sup>岡井隆氏は「下の句の「くねりて入りぬ」がおもしろい。「わが魂」がくねって入るのである」と注意している。「くねりて入りぬ」に目を止めた岡井氏の指摘には教えられる。作者鷗外はこの「おもしろい」発想をいかにして着想し得たのか。本論は霊魂が肉体を抜ける「幽体離脱」とも呼ばれるこのような現象をこれ以後も繰返し取上げる鷗外の根深い関心の裏に、この現象を単なる言葉の上の「あそび」として取上げたという以上の真実があるのではないかと考える。その推測の根拠の一つが「くねりて入りぬ」という表現である。立花隆氏は<sup>8</sup>「臨死体験（下）」に次のような幽体離脱体験談を載せている。

自分が体から離れて空中に浮いていることを発見したS・Sさんは、もしかしたらこのまま肉体に戻れず、死んでしまうのかもしれないと思って、パニック状態におちいった。早く自分の体に戻ろうと、手足をバタバタさせて、もがきにもがいた。すると少しずつ降下して、自分の体に近付いた。半分重なるくらいまで戻ったところで、どうしても最後のところがうまく合体できなかった。あせって、思わず、「戻りたーいっ」と心の中で叫ぶと、「にゅおおん」という感じの何ともいえない感覚が全身をつつみ、そのとたんに体の中に戻った。（下線前田）

この幽体離脱体験談は幽体が肉体に戻る際の感覚を「にゅおおん」と表現し、それを「何ともいえない感覚」としている。この「くねりて入りぬ」も「なんともいえない感

覚」の体験的な裏付がなければ考え出すことが出来ない表現のようで、「にゅおおん」という変わった感覚的な表現に通じるものがあるように思われる。

さて、「我百首」中最も注目されるのは、「四大仮合」「譴責」など難しい漢語が使われている一首である。

「四大仮合」について、<sup>9</sup>岡井隆氏は「万物を構成する四大要素である地水火風が、さまざまな因縁で仮りに和合して出来た、この自分という人間の身体」と説明している。そして「仏教語からなるが、鷗外は宗教的意味というより、シダイケゴウの音韻（漢語の響き）を好んだのであろう」としている。果たして「シダイケゴウの音韻を好んだ」だけの理由で鷗外はこの漢語を使用したのでしょうか。漢訳仏語「仮合」を使った背後に肉体的存在は仮のものであるという霊肉二元論に立つ解釈が存在すると本論は見る。霊的存在こそ真実在であるという鷗外の霊肉二元論が「四大仮合」の使用に漏れ出ていると見るのである。

これまで見てきたように、鷗外には靈魂と肉体とを対照させ、靈魂の優位を説こうとする傾向がある。肉体的な存在としての我々は仮の存在であって、靈魂こそが真実在であるという見方からするならば、この肉体はまさに「仮りに和合して出来た」ものであって、それは「まことの我」（靈魂）が一時宿るところのものに過ぎない。このように考えると「四大仮合」は単なる声調上の選択ではなく、矢張り鷗外の人間存在論に根拠を持つ措辞であったと見なければならない。

鷗外は明治42年10月「昴」に「金比羅」を発表する。

何だか自分の生活に内容が無いようで、平生哲学者と名告って、他人の思想の受売をしているのに嫌なような心持がする。船の機関ががたがたと云うのが耳に附く。自分の体も此船と同じことで、種々な思想を載せたり卸したり、がたがたと運転しているが、それに何の意義もないように思う。妻や子供の事を思つて見る。世には夫婦の愛や、家庭の幸福というような物を、人生の内容のように云っているものもある。併しそれも自分の空虚な処を充たすには足らな

い。妻も子供も、只因襲の朽ちた索で自分の機関に繋がれているに過ぎない。(下線前田)

まず、下線を引いた文言「自分の体」である。これを「自分」とせず「自分の体」といったところに注意したい。「自分の体」(「自分の機関」と同意)という表現には靈魂と肉体とが一体となって在る存在という二元論的存在論が背後にある。靈肉二元論的な思想がなければ世間通行の「自分」という言葉を用い、「自分も此船と同じことで」で十分意を尽くし得たはずである。それをわざわざ「自分の体」と言わなければならなかった鷗外の意図を汲むべきである。こんな所に表現の細部にまで注意を怠らなかった鷗外の厳密で細心な言葉に対する感覚がよく現われている。次に本論のこの読解を裏付けるのが「妻や子供の事を思つて見る。世には夫婦の愛や、家庭の幸福というような物を、人生の内容のように云っているものもある。併しそれも自分の空虚な処を充たすには足らない。妻も子供も、只因襲の朽ちた索で自分の機関に繋がれているに過ぎない」である。妻子は畢竟

「自分の空虚な処を充たすには足らない」存在とされているが、これを読んだ妻子はどう感じるだろうか。この一文を鷗外の妻子が読む時の胸中を想像すると、これは<sup>10</sup>甚だ思い遣りのない発言であるが、鷗外の真情に立つと、これは鷗外の人間存在についての思想から出た、まことに正直な表白であつたといわなければならない。即ち、子供や妻なるものは仮のものである肉体的存在の上から生じた関係であり、その結び付きは「因襲の朽ちた索で自分の機関に繋がれている」仮のものである。それ故それは真実の結び付きであるところの靈魂のそれであるとはとうてい言えないわけだからである。この率直な物言いには驚かされるが、鷗外は自己の存在論の一端を正直に述べたに過ぎぬといえるであろう。

このような考えを別の表現で表明した作品に「キタ・セクスアリス」(明治42年「昂」)がある。「二十になった」で始まる段に大学を卒業した主人公金井湛が見合いをする場面が出てくる。

妻というものを、どうせいつか持つことになるだろう。持つには嫌な奴では困る。嫌か好かを

こっちで極めるのは容易である。しかし女だって嫌な男を持ては困るだろう。生んで貰った親

に対して、こう云うのは、恩義に背くようではあるが、女が僕の容貌を見て、好だと思うということ、一寸想像しにくい。(中略) そんなら僕の霊の側はどうだ。余り結構な霊を持ち合わせているとも思わないが、これまで色々な人に触れて見たところが、僕の霊がそう気恥かしくて、包み隠してばかりいなければならないようにも思わない。霊の試験を受ける事になれば、僕だって必ず落第するとも思わない。さて結婚の風俗を見るに、容貌の見合はあるが、霊の見合は無い。

(下線前田)

作者は人間の存在を「容貌(肉体)」と「霊(魂)」とに分け、見合いには「容貌の見合」はあるが「霊の見合」はない、としている。これから人間の存在を作者が霊肉二元論的に考えていたという判断は動かしがたい。さて、霊肉のどちらを作者は重く見ているか。先の「マアテルリンクの脚本」のモンナ・ワンナと敵将プリンチワルリイとの対話を思い出すまでもなく、これはどうしても「霊の見合」を重く見ているといわなければならない。

今先の「幽体離脱」をほのめかす短歌の発展的な内容と考えることができるので「キタ・セクスアリス」の次の一場面を指摘しておく。最も散文の表現は、短歌作品の表現の率直さには及ばないようであるが。問題の箇所は「十九になった」で始まる一段にある。

僕はこの時忽ち醒覚したような心持がした。譬えば今まで波の渦巻の中にいたものが、岸の上に飛び上がって、波の騒ぐのを眺めるようなものである。宴会の一座が純客観的に僕の目に映ずる。

卒業式後の謝恩会の一場面である。直前まで他の参加者同様宴席の賑わいに呑み込まれていた金井湛がある些細な事件をきっかけに引用箇所のような心境に至ったというのである。その時の心境が読者の頭にクッキリと刻み付けられるのは、いかにもこの作者らしい輪郭の明確な「今まで波の渦巻の中にいたものが、岸の上に飛び上がって、波の騒ぐのを眺める」という具体的な比喩表現の効果である。このように視覚的で具体的な描写を読むとあるいはここに書かれているような、自分の意識が突然その場を離れるような一寸不思議な体験を作者は実際に持っていたのではなかったかという推測に再び捉われる。

ところで、「自分の意識が突然その場を離れるような一寸不思議な体験」は我々の日常的体験でもある。それは、人と話しをしていて、ふいに自分の意識が会話を離れ、話をしている相手の目とか、口元とかに移ってしまう、というような体験である。ただ、これを我々は「気が散る」とか「集中していない」とかといった否定的表現で片付けてしまう。しかし、「キタ・セクスアリス」の表現を丹念に辿ってみると、この場面で作者が描こうとしている心理状態は上に述べた我々にも起こりうるようなそれとは少し違う。引用の文章は「譬えば今まで波の渦巻の中にいたものが、岸の上に飛び上がって、波の騒ぐのを眺めるようなものである」と言っている。これは自分の意識が全く肉体を離れて宴会の場を上から眺め渡しているような<sup>11</sup>特徴のある書き方である。我々の「気が散る」「集中していない」とは異なる精神状態である。これまで考察してきた幾つかの文章や短歌作品を思い合わせると、幽体離脱現象を思わせるこの描写の背後には実体験が存在するのではないかと思わせられるのである。

これまで論じてきた鷗外の作品の理解をこれに加えて、この箇所を今少し深い所まで読み解きたい。先に作者は「我百首」で「魂は人に逢わんと抜け出でて壁の間をくねりて入りぬ」と言い、実体験を暗示する表現を用いて「靈魂が肉体を抜け出る」ことを描こうとした。また漢訳仏語「四大仮合」を用い、この肉体を「仮りに和合して出来た」と表現した。作者にしてみれば、我々の肉体は靈魂の仮の宿りの場であって、そうであればその宿りの場を一時的に抜け出ることもありうると思ったのであろうか。いや、考えただけではいいのではないのか。幾度も繰り返される「幽体離脱」の描写を読むと、先にも述べたことだが、この作者は実際に自らの靈魂が肉体を離れる体験を持っていたのではないかと推測したくなる。

明治43年7月「三田文学」に発表された「花子」では、この靈肉の二元論が繰り返され、更に明瞭に靈の優位が示される。ロダンは次のように言う。

人の体も形が形として面白いのではありません。靈の鏡です。形の上に透き徹って見える内



の焰が面白いのです。

ここにも先に「キタ・セクスアリス」で「霊の見合」「容貌の見合」として語られたのと同じ霊肉二元論的思想が今度は余りにも明瞭な表現を用いて語られている。即ち、人間の存在は霊と肉との二つの要素から成り立っており、肉体（「人の体」）は「霊の鏡」に過ぎないという。そして、「形の上に透き徹って見える内の焰が面白い」とロダンに言わせている。これは「人の形」は真の実体ではなく、真の実体は「霊」であるという一歩踏み込んだ思想である。霊肉二元の優劣の関係はこの言葉によって明確に示されたといわなければならない。

鷗外という人は入念な人であった。「花子」発表と大体同じ時期に、これは創作ではなく翻訳作品であるが、同様の考えを大胆に述べた作品がある。後に「諸国物語」に収録されることになる「死」がそれである。作品に二人の青年仕官の「死」をめぐる対話がある。この作品で強い議論を展開するゴロロボフと呼ぶ士官は次のように言う。

わたくしの霊というわたくしの自己です。体は仮の宿に過ぎません。

何と率直な立言ではないか。ここにも先に見たのと同様の思想が紛れもないほどあからさまに語られている。この作品の発表は明治43年9月で、「花子」発表の二ヶ月後である。この二作品の近接する発表時期から考えると、当時の鷗外には「霊」は「肉」の上に位置する支配的存在という思想が非常に親しいものであったのであろう。それを一方では創作でまた一方では翻訳で示そうとしているかのごとくである。

ここで「妄想」（明治44年3月）を挙げずに筆を進めることは、大きな手抜きという批判を受けることになるだろう。

生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。（中略）併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。（中略）一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞台監督

の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思はれる。

よく知られた文章であるが、ここにある「此役が即ち生だとは考えられない。背後にある或る物が真の生ではあるまいかと思われる」という文に注意してみたい。ここに見られる二人格は丁度「舞姫」の「奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり」の「きのうまでの我ならぬ我」（舞台での役）と「まことの我」（真の生）との関係に対応する。ただ、「舞姫」が「我ならぬ我を攻めむに似たり」と主情的であるのに対して「妄想」の筆致は観照的である。

この「舞姫」の主情的な筆致と「妄想」の観照的なそれとの違いは第三の自分の視点の有无によるものであろう。「舞姫」の場合と同じく、「妄想」では一人の人物の中の「舞台の上の自分」と「背後の何物か」という二人の自分が存在する。ところが更にその他に「一寸舞台から降りて、静かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たい」とその二人の自分を見詰める第三の自分がある。この第三の自分の存在ゆえに「妄想」のこの文章は観照的な印象を与えるのであろう。このような第三の自分の存在は「舞姫」にはない。ここに矢張り鷗外の思索の展開を見るべきであらう。

鷗外は明治44年9月から「昂」に「雁」を連載し始める。その「拾陸」（明治45年6月発行昂第6号）に次のような箇所がある。

此時からお玉は自分で自分の言ったり為たりする事を竊に観察するようになって、末造が来てもこれまでのように蟠まりのない直情で接せず、意識してもてなすようになった。その間に別に本心があって、体を離れて傍へ退いて見ている。そしてその本心は末造をも、末造の自由になっている自分をも嘲笑っている。お玉はそれに始て気が附いた時ぞっとした。併し時が立つと共に、お玉は慣れて、自分の心はそうなくてはならぬもののように感じて来た。」（下線前田）

さて世の鷗外研究者はこれをどのように解釈するのであろうか。<sup>12</sup>三好行雄氏はこれを

「この前後、金で身を売る女の知恵をはじめて身につけたにすぎない、といえはいえそうだが、それにしても、状況を外から見ることを覚えたもう一人のお玉が、やがて、状況に封じこまれた〈私〉の脱出を夢みはじめるのは自然のなりゆきであろう」（下線前田）という。そうであろうか。先に見た「キタ・セクスアリス」の「自分の意識が全く肉体を離れて宴会の場を上から眺め渡しているような特徴のある書き方」やすぐ後に取上げる「不思議な鏡」の魂の離脱の描写と同じく、「その間別に本心があって、体を離れて傍へ退いて見ている」というこの場面も作者の実体験に基づく描写（－その実体験が何であるかは分からないが－）であるという推論に論者は傾く。決して「女の知恵」故にできる「自己を客観視する」というような観念の世界の話ではない。

明治45年1月に鷗外は不思議な内容の小説<sup>13</sup>「不思議な鏡」を発表している。時期的には翌年6月に「昴」に出た「雁 拾陸」の前引の箇所を書いた時期から半年後位に書かれたものと推定される。肉体を抜け出した男の魂が、当時の文壇で活躍する作家の集まる場所に飛んでいき、そこで一人一人の作家の簡単な批評を行うという話であるが、本論の関心はこの内容にあるのではなく、霊魂が肉体を抜け出るというその設定にある。

丁度朝内にいて、隣の間でお上さんが遺物の勘定をしているのを聞いていた時であった。譬えば磁石に鉄が吸い寄せられるように、己の魂は体を抜けて外に出た。皮の外へは出られないと、好く西洋人が云うが、皮の外へ出られたのである。

（略）只体の方は机の前に据わって、学生を持つような毛繻子の囊に、物を入れている。影の方はその前に立って、ふらふらしながら、気の利かない体のする事をみている丈の相違である。

これは主人公の霊魂が肉体を抜け出す場面である。ここには「雁」に見られたのと同様の幽体離脱の更に詳しい描写が付け加えられている。それは魂が抜け出した後の肉体の描写であり、それは「雁」では簡単な描写で済まされたものであった。体外離脱体験の報告は現在も少なくないが、よく目にするのが臨死体験時の幽体離脱である。その時、肉体は

《亡骸》であり、もう活動することはない。ただ、死の体験を伴わない幽体離脱現象もありその記録も存在する。その時肉体は死の状態にあるのではなく、「不思議な鏡」の「己」のように活動している。<sup>14</sup>一例を挙げる。

十年くらい前になりますが、私と主人がならんでショッピングセンターに向かって歩いていったときのことで。突然私の意識が、私の後五メートルくらいのところに移ってしまって、前の私をじっと見ているのです。私の意識が抜けた脱け殻の体は前を歩いているのですが、見たところ何の変わりもありません。後に移った私には形は何もなく視点と意識があるだけです。

『あれ、おかしいな』と思っていると、また前を歩いている私に意識が戻り、前と同じように主人と楽しそうな会話がつづきました。私の意識が抜けている間も、会話はずっとつづいていたのです。そしてまたいつのまにか、意識が五メートル後に戻って、また前を歩いている私をじっと見ているのです。そういうことがその日三、四回繰り返されました。

この体験談でも幽体離脱後の自分の肉体は幽体離脱以前と変わらぬ行動を続けているとある。まさに「不思議な鏡」の「影の方はその前に立って、ふらふらしながら、気の利かない体のする事をみている丈の相違である」とある状態である。「不思議な鏡」のこの描写を我々は一体どう解釈すべきか。現在のところ、論者の推測に過ぎないとはいえ、繰り返される幽体離脱の描写は、鷗外にそれに似た体験があったことを思わせるに十分である。そうした体験から鷗外は実感的に心霊の実在性を確信するようになっていたのではないであろうか。<sup>15</sup>清田文武氏は「人間精神の深層に関連する「霊」への関心は、殊に明治四十年代以後の鷗外の文芸観の形成にあずかるころがあった」として、霊魂に寄せる鷗外の関心とその文学に影響を与えているという見解を示している。

#### (05) 「自然」を尊重する念、そして死 ―大正―

「歴史其儘と歴史離れ」（大正4年1月）という短い文章で鷗外は言う。

わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる「自然」を尊重する念を発した。そしてそれ

を猥に変更するのが厭になった。

ここで指摘されている「自然」とは何か。思うに、この「自然」は史実の表面的な尊重を意味するものではあるまい。これ以前大正3年10月に鷗外は単行本「意地」の広告文を出している。

「意地」は最も新らしき意味に於ける歴史小説なり。従来の意味に於ける歴史小説の行き方を全然破壊して、別に史実の新らしき取扱い方を創定したる最初の作なり。

この「史実の新らしき取扱い方を創定した」という文言は注意すべきである。「従来の意味に於ける歴史小説」とは、一方では講談に見られる享受者の興味を惹く為に敢えてする史実の歪曲のある小説であり、また一方では史実に忠実であろうと努める余り文学的な面白さを没却し去った小説であろう。これに対して「意地」に収められた三作には、史実に忠実であると同時にそこには作者の人間観察の目が光っている。そこには文学的な味わいが自ずから生まれる。それがそれまでの歴史小説とは異なる所といえるのではないであろうか。

人には誰が上にも好きな人、いやな人というものがある。そしてなぜ好きだか、いやだかと穿鑿してみると、どうかすると捕捉するほどの拠りどころがない。忠利が弥一右衛門を好かぬのも、そんなわけである。（「阿部一族」）

この文章は先にもあげたが、これに対応する文言は鷗外が用いた史料<sup>16</sup>「阿部茶事談」にはない。鷗外は史料の間隙を自己自身の人間観察から得た人間観で埋めてゆく。この箇所は奇しくも「人と人との間を支配する人間の計らいの及ばぬ力の存在」を指摘するあの霊の存在を主張する「マアテルリンクの脚本」の思想そのものである。

「歴史其儘と歴史離れ」でいう「自然」とはこのように史実を尊重しそれを深く読み解くところに現出する人間の「自然」ではなかったであろうか。それはあの「マアテルリンクの脚本」で言われた霊的世界の真実を人間の世界に現すことでもあった。

大正5年「高瀬舟」「寒山拾得」を書き終えた鷗外はおもむろに筆を歴史小説から史伝

の大作「渋江抽斎」へと向け始める。「渋江抽斎」以降の作ではますます史実尊重の傾向を強くしてゆくが、史料を読み解く人間観察の目が光る行文は物語を史実の羅列故に陥る無味乾燥の退屈から救っている。その人間観察の眼の背後に構えているのは、いうまでもなく「霊」を真実とする鷗外の人間存在に対する理解であった。

大正11年7月6日、死の到来を間近に予見した鷗外は遺言を口述し親友賀古鶴所に書き取らせる。

死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ。奈何ナル官憲威力ト雖、此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス。

余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス。宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ルハ瞬間、アラユ

ル外形的取扱ヒヲ辭ス。森林太郎トシテ死セントス。墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス

これまで本論は人間存在の真実在は靈魂にあるという鷗外の人間存在論を年代を区切って追究してきた。そして今この「遺言」を読み、文中の「外形的取扱ヒ」という文言を殊更に感慨深く読む。「外形的」という言葉に籠められた鷗外の真実を読み取るからである。通常我々はこれまで関わってきた社会的機関の与える栄典等を「外形的取扱ヒ」として退けることはない。それを敢えて拒絶するというのはその拒絶の意思の背後に余程強固な思想が存在していたと考えなければならない。「その仮面のもうひとつ下に、こういう遺書を書いた「人の子」がひとり、実は六十年間息を殺して潜んでいたのである」という<sup>17</sup>論者は、そのような鷗外の行為の動機を「恨み」という文字で解釈しようとしている。或いはこれを「やはり晩年の或る種の思索・修行の結果としての悟達を示すものではなかったであらうか」として、大正9年と同10年に鷗外が見性宗般師の金剛経提唱を聴講した事実を挙げ、この悟達を「現象界の一切はうたかたの影の如きものと達観して無為に徹するならば、その時その者の享ける福は本人の分際を越えて豊かなものとなる、との悟りである」と解く<sup>18</sup>論者もいる。

本論はそれらに対して鷗外の霊肉二元論的な人間存在論からこの「遺言」の投げ掛ける謎を考えたい。霊肉二元論の人間存在論からすれば、この世界はあくまで仮象であって、

その世界で与えられる荣誉栄典も幻の如きものである他ない。それ故鷗外は「宮内省陸軍皆縁故アレドモ」としながら、その栄典を「外形的取扱ヒ」として退けたのである。或いは人はいうかもしれない。何もそこまで意固地になって拒絶することはないではないかと。しかし、これが森林太郎という人であったのだ。私は今父を回想する<sup>19</sup>森茉莉のあの美しい文章を思い出す。

私には父が、学問や芸術に対して、山の頂を極める人のような、きれいな情熱を持っていた人のように、見えた。私は時々父に解らない字や、仮名遣いをきいたが、そういう時私はいつもは大好きな父が、いくらか嫌いになるのであった。それは父の字や仮名遣いにたいする、異様に烈しい心が感じられて、それがうるさく思われたからで、あった。私に教えて呉れようとしている優しいようすの中にも、父のまるで怒ってでもいるような烈しい心がひそめられていて、それが私にうるさい感じをあたえたので、あった。父は眼に見えない「嘘字」や「仮名遣いの間違い」という敵に向って怒っていて、それが幼い私にも伝わるので、あった。

恰も「眼に見えない「嘘字」や「仮名遣いの間違い」という敵に向って怒っ」たように、「宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ」と強い言葉を残した鷗外は、虚妄としか見えないこの世の栄典をその故に峻拒したのであろう。あの遺言に現われた拒絶の烈しさは「山の頂を極める人のような、きれいな情熱」の最後の輝きだったのである。（終）

#### 【注】

森鷗外作品本文は岩波版第三次鷗外全集により、旧字は新字に旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。ただし、文語文の場合は、旧仮名遣いはそのままとした。

- (1) 「舞姫」初出本文（明治23年1月発行「国民之友第69号附録」）では「攻せむる」が「攻撃する」となっている
- (2) 「貧者の宝」及び「知恵と運命」は共に山崎剛訳平河出版社のものを用了。ただし、「知恵と運命」は書名が「限りなき幸福へ」となっている

- (3) 金子幸代はこれを「霊の見合い」としている。『鷗外と〈女性〉』(大東出版社) 164頁
- (4) 作品の制作は30年代であるが、「うた日記」として発表されたのが40年代であるので、便宜上40年代の作品として扱う
- (5) 角川書店「新編国歌大観 第一巻 勅撰集編索引」25頁に「あこ(く)がれ」に発想を持つ歌が78首挙げられている
- (6) 小堀桂一郎「鷗外選集 第十巻」(1979年8月 岩波書店) 解説
- (7) 岡井隆「鷗外・茂吉・杳太郎 - 「テエベス百門」の夕映え」(書肆山田) 287頁
- (8) 立花隆「臨死体験(下)」(1994年9月 文藝春秋) 201頁
- (9) (7)に挙げたものと同じ 305頁
- (10) 鷗外はこのような読み手の胸中を忖度しないかのような遠慮のない物言いをし  
ばしばする人であった。賀古鶴所を思わせる相沢謙吉に向かって「嗚呼、相沢謙吉  
が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今  
日までも残れりけり」と恨み節で「舞姫」を結んだのはその一例である。
- (11) 肉体を離脱した「靈魂」が自分の肉体を見下ろすという記述は臨死体験者の体験談  
に多く現われる。レイモンド・A. ムーディ・Jr.、中山善之訳「かいまみた死  
後の世界」(1989年12月 評論社)に「自分自身の物理的肉体から抜け出し  
たのがわかった。しかしこの時はまだ、今までとおなじ物理的世界にいて、わたし  
はある距離を保った場所から、まるで傍観者のように自分自身の物理的肉体を見  
つめていた。この異常な状態で、自分がついさきほど抜け出した物理的な肉体に蘇  
生術が施されているのを観察している」(31頁)とある。これは著者ムーディが  
「集めた数多くの事例に共通して繰り返し現われる要素」の一つであるという。同  
書(47頁以下)には「物理的肉体を離れる」体験談が25例挙げられているが、



「自分の肉体を真上から見ることができました」（６７頁）という体験談も数例ある。

（１２）三好行雄「日本近代文学大系 １１ 森鷗外集」（昭和４９年９月 角川書店）

１６５頁

（１３）明治４４年１２月１７日の日記に「夜に入りて不思議な鏡脱稿す」とある

（１４）注（８）に同じ １４３頁 この他にも同書には体験例が紹介されている

（１５）「鷗外文芸の研究 中年期篇」（１９９１年１月 有精堂）２１９頁

（１６）藤本千鶴子「校本『阿部茶事談』」（『近世・近代のことばと文学』（昭和４７年 第一学習社） 所収）による

（１７）高橋義孝「森鷗外」（昭和６０年１１月 新潮社）１２７頁

（１８）小堀桂一郎「森鷗外」（２０１３年１月 ミネルバ書房）６６７頁

（１９）森茉莉「父の帽子」（１９７５年 筑摩書房 ９頁）旧字旧仮名を新字新仮名に改めた